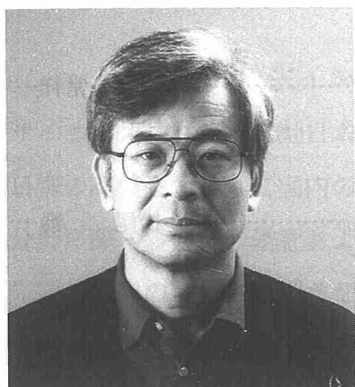


評議員に就任して



黒岩 常 祥

kuroiwa@biol.s.u-tokyo.ac.jp

ほぼ5年におよぶ専攻長の役目を漸く終え、さていよいよ研究に専念できると意気込んで実験計画を立てた矢先、評議員に選出された。この先研究はどうなってしまおうのだろうかとの思いが頭を離れず、数日間ボヤッとしていた。そんな時、初めての経験をした。

毎日自転車通勤している。その途中、小学校の同窓生のお好み焼き屋のイサムさん、床屋のノブさん、Mモータースのデブさんらに会い、景気のこと、祭りのことなど何かしら声をかけあう。この日はデブさんと出会った。「先日車検した車の調子はどうだい。」「うんいいようだよ。ところでデブさん、この新型の自転車の、左のペダルクランクのねじが緩んで外れそうなんだよ。締めてくれないか、二度と外れないようにぎっちり頼むよ。」「よしや。」とクラスでもとびきり親切だったデブさんは、早速特殊なドライバーを持ってきてギユウギユウと締めてくれた。20分足らずの快走で大学へ。その夜11時頃、急いで帰ろうとこのペダルに足を掛けたとたん、バランと落ちてしまった。デブさんがあれほど力を込めて締めてくれたのに。暗闇の中、早速ドライバーを持ってきて、デブさんに負けじと渾身の力をこめて締めた。さあ帰ろうと乗ると、何かおかしい。なんと二つのペダルクランクを90度に締めてしまっているではないか。面白いので、どんな調子か赤門あたりまでこいでみたがやはり具合が悪い。ペダルクランクの90度の違いは大きいなどと思いながらガクガクと引き返した。満身の力を込めて締めたネジが緩まず苦戦していると、学生が懐中電灯を持ってきて助けてくれた。シャッターの下りたMモータースの

前を通りながら、車検の自動車のネジは大丈夫だろうかのため息がでた。

その後しばらくして、将来計画委員会委員長を任された。真に独創的な研究を継続的に生み出すための理学系の「家風」や「土台」に関して、あらゆる角度から検討する時期が来たようである。現在この委員会での主な議題は、企画委員会と理学系研究科の教授会で逐次報告しているように、柏研究科構想の実現へ向けて、理学系研究科の対応、柏以後における教育研究体制の充実、特に地学系の3専攻の問題、情報学研究科の設置の問題などである。柏研究科はその実現に向けて忍耐強い努力が続けられているが、研究科や研究機構の立ち上げは、精神的にも肉体的にも大変に労力のいる仕事である。私自身は各地を転々とした後、岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所の設立に関与し、そこで10年ほど過ごした。研究機構の設置が決まってから、建屋の設計（外壁のタイルの色や形など細かいことまで）、内部の研究室の設計（共同利用の研究室やRI室、トイレや廊下など）、電気配線、排水設備など周辺設備、研究備品の購入や設置など、またこれらに関わる書類書きなど、専門の事務官にまかせる部分も多々あるが、我々教官が昼夜を問わず走り回って自ら処理してゆかなければならない。教官はこうした設置事業を進めている間でも、研究業績をあげることを要求される。岡崎の場合、教官だけでなく支援組織である技官の純増定員も多かった。しかし、柏の場合には技官の純増や支援組織の充実は今のところ見込みが薄い。理学系研究科では23人の貴重な教官を柏に送り出す訳だが、これらの教官の多くが初めての経験であろうし、暗中模索の手作業も多かろう。自転車のように簡単に手直しが効かないことを思うと、送り出す研究科の方も相当に親身になって支援をしなければ、最大の目標である先端研究教育の役割を果たすことが難しくなる。この新研究科の設置の好機を生かすには、これまで提示されている支援策の他に、さらなる支援を検討する必要があるのではないだろうか。

着任にあたって



松 尾 泰 (物理学専攻)

matsuo@phys.s.u-tokyo.ac.jp

九年前、大学院で理論物理学を学び卒業した際、この先また本郷に戻ることはあるまいと思っておりました。しかしどういう星の巡り合わせか、その後結局二度もお世話になることになりました。('92-'94の助手時代、そして今) その間、私は米国、ヨーロッパ、京都など様々な場所でポスドクあるいは教官として研究生活を送って参りました(この九年間の引っ越しの回数=11回!)。この七月に本郷に帰り学生時代に親しんだ東大のカラーにふれると、ホッとすると同時に責任を感じて身が引き締まる思いをしております。

さて、私のことを書く上でおそらく一番面白いと思われるのは、上で触れた九年間で11回の引っ越しを経験したということかもしれませんので、以下駄文を連ねてみたいと思います。

私は学位をとったあとシカゴにポスドクとして行くことが決まっておりました。

私の研究課題は素粒子理論の超弦模型といわれるもので、私が学生をしている間非常な興隆をしておりました。シカゴに行くというのもこの分野で著名な仕事をされている方たちがおられるからでした。しかし私が渡米する頃にはこの理論もいくつかの困難な点にぶつかってやや停滞が見えておりました。この学問としての転換期はちょうどそのころ起こったアメリカの経済的な転換期と重なっておりました。私はシカゴに2年間滞在するはずだったのですが、1年目の終わりに New Jersey 州が基礎研究に多くの投資をすることになり、私が師事していたシカゴの主力の先生たちは州立大学である Rutgers 大学に移ることになってしまいました。私も多少迷いましたが彼らについていくことにしました。Rutgers は他の大学からも数人の著名な方たちを集めていて、新しい方向性を目指す一つの中心地になっていきました。実際そこで低次元量子重力理論における大きなブレイクスルーが起こったのを始め、最近のデュアリティーの発見など時

代の転換点となるような大きな仕事がなされています。たぶんこの時代に New Jersey 州で起こったことは日本の大学の研究教育環境を考える上でも大変参考になるモデルを与えていると思われます。

結局 New Jersey に一年滞在したのち、New York 州の Stony Brook 校に一ヶ月ビジターとして滞在し、さらにフランスの Ecole Normale に移りました。ちょうどその少し前にベルリンの壁が崩れソ連や東欧の優秀な科学者たちがアメリカとヨーロッパに流れてきました。フランスはその当時かなり大きな決断をしてそれほど多くはないポジションを優秀なロシア人達に明け渡すことにしていました。Ecole Normale にも主にランダウ研究所などの著名な学者達が集りその後のフランスの物理学研究の世界的な立場の興隆に大きく貢献したことは言うまでもありません。

私はフランスを学問だけでなく、生活の面でも大いに楽しんでおりましたが、フランスの制度上ポスドクは1年までということになっていたため、その次の年にはデンマークのニールスボーア研究所に移ることになりました。しかしその直前に東大で助手として雇っていただくことが決まっていたため3ヶ月で北欧を後にしました。東大には2年ほどお世話になりましたが、その間結婚をしたり研究室が理学部1号館改築のために2食横のプレハブに引っ越しなど相変わらず動きの多い毎日を繰り返しておりました。その後、京都大学基礎物理学研究所に移りましたが、こちらもちょうど広島大学理論研究所との合併を終えた直後で、北白川と宇治に二つの研究所があるという変則的な時代にあつたことになりました。私は結局在籍三年のうち最初の1年半を宇治、残りの1年半を北白川にできた新館で過ごすこととなりました。

こうしてみると、私は学位を取ってからというもの、行く先々で大なり小なりの変革や変化にあつたり、小刻みに引っ越しを繰り返してきたことがわかります。

さて、本郷も近いうちに新1号館が完成し新たな変化の時期が来ます。もちろんこちらは変化と言ってもスタッフや学生は同じですので大きく変わるわけではありませんが、全体としての気分が変わるのは確かでしょう。現在素粒子という学問自体も大きな変革の時期にあり、これから本郷で起こる新たな動きに胸を躍らせつつ、筆を置くことにいたします。